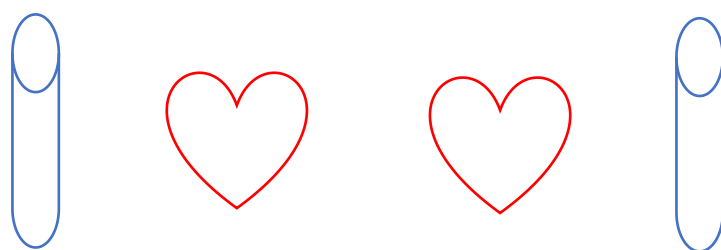


平和の鐘を鳴らそう 2024

平和についてメッセージ集



広げよう平和を思い行動する心

P e a c e f o r T o m o r r o w

2024年8月15日

広島ユネスコ協会

過ぎゆく時間と受け継ぐ記憶

記憶は消えても記録は消えない、という考え方があります。私もそう考えていました。しかし、記録も時代が進み、扱う人物も変われば捉え方が変わっていくのではないかと、そう考えることが増えるようになりました。その脆弱性は記憶も記録も同じであり、真の意味での過去を鑑みる、という行為にはそのどちらも欠けていてはならないのではないのでしょうか。

1945年、8月6日。ここ広島で起こった悲劇。その当時に生きた人の記憶の証言も、その記録も、今や広島県民にとっては過去の出来事であり他人事である、といったような考えがどこかにあるように感じられます。私が広島大学付属高等学校ユネスコ班の活動の一環として、碑巡りをはじめとした記録の跡を辿ると、そこには県外から平和学習にやってくる学生や外国人の姿。地元広島の人々の数は彼らと比べて圧倒的に少なく思われました。

確かに、この緑に溢れ、悠久にも感じられる平和な時が流れる広島で穏やかに過ごす中で、過去の痛ましい記憶を感じない、ということは喜ばしいことなのかもしれません。しかし、本当にそれだけでいいのでしょうか。恒久的平和を目指す上で、広島、長崎で起こった悲劇を過去に埋めてしまってはならないのではないのでしょうか。ここ広島で生きる我々には、広島県民として、もっと大事な「よく生きる」ために「なすべき事」があるのではないのでしょうか。

時間の流れとともに今は絶えず前進し、未来は今となり、そして過去になります。時間とともに増えゆく過去は、確実に薄れていきます。人間も生命として、全てを記憶し続けることは不可能です。生命として当然のこととして、我々は「忘れてはいけないこと」もいつか忘れていきます。過ぎ去る時間の流れは止められません。

だからこそ、この地に残る記憶と記録は重要であり、より密接に関わる広島県民は大事にしなければならないものであると考えます。今日この日だけでなく、平和を得られている今につながってきた過去に思いを馳せ、その歴史を継承していく意思を持っていくべきであると考え、日々を過ごしていきたいと思えます。

2024年8月15日

広島大学附属高等学校 ユネスコ班 内田 礼夢

Wishing for a world without war or nuclear weapons

Seventy-nine years ago today, the Pacific War, which lasted nearly four years, came to an end. In those four years, some 40 million lives, including civilians', were lost worldwide. This includes the victims of the atomic bombs dropped on Hiroshima and Nagasaki, which claimed the lives of 140,000 and 70,000 people respectively. The atomic bombs destroyed the lives of countless people in an instant.

We must never forget this. To this day, many atomic bomb survivors, hibakusya, and their families have told their stories and conveyed how devastating the atomic bombings were, in the hope that the same thing will never happen again.

This has taught us the importance of peace. However, despite the pleas of hibakusya, war and nuclear weapons have not yet been eliminated.

Wars are still ongoing in Ukraine and Gaza and many people are suffering. While we hope for a peaceful world, we must also face up to difficult challenges. The number of hibakusya who remain to give us their accounts of the reality of the bombing is decreasing year by year. We are losing the voices of those who have lived through the bombings, and we must not forget their warnings. I believe that it is our role as residents of Hiroshima to learn about the reality of the atomic bombing and to share it with the rest of the world.

I recently had the opportunity to listen to a 106-year-old hibakusya talk about her experience of the atomic bombing. It was the first time she had spoken to anyone outside her family about the experience. Her father was exposed to the bomb but was not seriously injured. However, two weeks later, red spots appeared all over his body. He was unable to swallow food, and all his internal organs came out, but he never once said he was in pain. Then, on 3 September, 1945, her father passed away. She told us with tears in her eyes that 79 years later she still remembers the smell of the bomb.

Nuclear weapons rob us of our loved ones. Such suffering must not be inflicted on anyone.

Ending war and preventing the use of nuclear weapons --- these are essential if we are to continue living.

I ring this bell today in memory of those who lost their lives in the atomic bombings and those who are still suffering from the loss of their loved ones.

Thank you very much for your kind attention.

広島大学附属高等学校 ユネスコ班 山代 夏葵

原爆の惨禍を未来へ繋ぎ

核兵器廃絶の思いを世界中に広める

私の曾祖父は、原爆投下直後の広島市に救助活動のために入り、残留放射能を浴びて被爆しました。私は被爆4世になります。

曾祖父は原爆投下当時、広島市から約38km離れたところで、真夏の太陽光線を遮る不気味な閃光をみました。その後、広島市へ救助活動のために入り、歩いて爆心地付近まで行くと、黒焦げで性別も顔も全くわからなくなった多くの死体を目にします。そして、曾祖父は広島の惨状を目にしたときの思いを次のように書き残しています。「地震や雷による被害なら諦めもつくが、人間が作り出した核兵器によるもので許すことができない」と。人間らしく生きることも死ぬこともできなかった人たちの姿に怒りを禁じえなかったのだと思います。核兵器は存在自体許されてはならないものです。

私の曾祖父は自身の被爆の体験を自身の著書に書き残しました。しかし、私の曾祖父は私が生まれる前に亡くなりました。私は曾祖父の被爆体験を聞くことはできませんでした。

今では被爆者の平均年齢は85歳を超え、私たちは被爆者の方々の声を聞ける最後の世代と言われています。

そして私たち高校生がすべきことは、原爆の惨禍を未来へ繋ぎ、核廃絶の思いを世界中に広めることです。

核兵器がある限り、世界に平和は訪れません。平和な世界を作るには人々がお互いに思いやりを持ち、平和な世界を作るのは私たち自身であるということを再確認することが大事なのではないのでしょうか。

出来ない、やっても無駄だ。そんなマイナスな言葉を重ねれば重ねるほど、物事は良くない方向へ進むでしょう。しかし、できる、やってみよう、と言った少しでも明るくポジティブな言葉を重ねれば重ねるほど、1つ1つの言葉の力は小さくとも、着実に前へ進んでいきます。私たちのスローガンである「ビリョクだけどもリョクじゃない」という言葉も、核なき世界を夢見て活動する私たち高校生の思いが込められています。

私は曾祖父の思いや被爆者の方々の思いを世界に末長く伝えていき、核も戦争も誰かに傷つけられるようなこともない平和な世界が訪れるまで平和活動を続けていきます。

27代高校生平和大使 基町高等学校 甲斐 なつき

地球村の平和のための祈り

戦争のない平和な地球村で暮らせる世の中は、いつやってくるのでしょうか。今もロシアや中東で多くの市民が苦痛を受けているという現実、私たちに悲しくさせます。第二次世界大戦以降、ユネスコ運動を通じ様々な活動で努力していますが、まだまだ地球村の平和は不十分だと改めて思う今日この頃です。

しかし、日本と大韓民国は、過去に執着することなく、友好的な関係をうまく維持していると思います。特に若い世代で顕著だと思います。日本のアニメが好きであったり、K-POPと一緒に歌ったりなど、今や日韓両国の文化が融合し、若い世代の新しい文化が形成されているようです。

日韓両国は政治的、経済的、安保的側面を考慮しつつ、平和のための努力を持続的に実践しなければならないと思います。大邱広域市と広島市の青少年交流、ユネスコ大邱協会との姉妹縁組など、民間交流の活性化もそういった方法だと思います。

今後も日韓両国の指導者と国民、皆が人類愛を胸に抱き、隣人を愛し、皆に感謝し、困難な人に配慮する生活を実践し、それがやがて習慣となり、人類共通の善が実現すれば、平和は自ずとついてくると思います。

ユネスコの平和実現の理念を実践している私たちすべてのユネスコ人は、日韓両国間の平和的努力を支持し、両国国民間の平和のためにあらゆる交流や民間活動に積極的に参加、連帯、協力することを誓い、今後も両国の協力を基盤として、全世界の平和と安全を持続的に維持することを祈願いたします。

ご清聴ありがとうございました。

2024年8月15日

韓国ユネスコ大邱協会会長 申東鶴（シン・ドンハク）

（代読 広島ユネスコ協会事務局長 森木 学）
（翻訳 広島ユネスコ協会理事 渡邊優子）

せんそう ひと こころ なか う
戦争は人の心の中で生まれるものであるから、

ひと こころ なか へいわ とりで きず
人の心の中に平和の砦を築かなければならない。

Since wars begin in the minds of men, it is in the minds of men
that the defenses of peace must be constructed.

(ユネスコ憲章の前文より、Preamble of The Constitution of UNESCO)

へいわせんげん
わたしの平和宣言 Manifesto 2000 for a Culture of Peace and Non-Violence

せいめい たいせつ
すべての人の生命を大切にします Respect All Life

ぼうりよく ゆる
どんな暴力も許しません Reject Violence

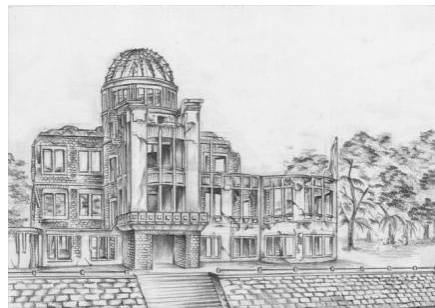
おも こころ も たす あ
思いやりの心を持ち、助け合います Share with Others

あいて たらば た かんが
相手の立場に立って考えます Listen to Understand

ちきゅうかんきょう まも
かけがえのない地球環境を守ります Preserve the Planet

ちから あ
みんなで力を合わせます Rediscover Solidarity

(1998年にノーベル平和賞受賞者が国際人権会議で起草した6項目の誓いより)



広島ユネスコ協会